

テーマ	教育のUD化を推進するために必要な「ヒト・モノ・コト」
発表者 (所属)	企画者：上條 大志 (小田原市教育委員会) 司会者：上條 大志 (小田原市教育委員会) 話題提供者：片岡 寛仁 (小田原市立酒匂小学校) 北森 恵 (富山県公立小学校) 池田 真由美 (荒川区立第二日暮里小学校) 指定討論者：阿部 利彦 (星槎大学大学院教育実践研究科)
【発表概要】 教育のユニバーサルデザイン (UD) 化は、学習者の多様性を尊重し、より多くの学習者が主体的に学べる環境を調整する意味でとても重要な視点である。アクセシビリティの向上だけでなく、学びの質そのものを高めるアプローチとなるだろう。学級内での多様性が尊重されることにより、インクルーシブな学級文化の形成にも貢献するだろう。 また、教師にとっても重要な視点である。教育のUD化により、一人ひとりの教育的ニーズに対応できる指導・支援スキルの獲得につながり、今後の教師人生を充実させるスキルアップにも大きく影響していくだろう。 しかしながら、教育のUD化の重要性に共感する学校現場が増えているにも関わらず、それが進んでいるとは言えないのではないかと。仮に進んでいるのであれば、もっと多くの学校が研究会等において、主体的に学ぶ学習者の姿が報告されているだろう。さらには、どの学校現場でも、質の高い教育活動が行われ、インクルーシブな学級が育っているはずである。 本シンポジウムでは、このような状況の中で、教育のUD化の推進し、主体的な学習者の育成を実現してきた実践者に話題提供いただく。さらには、討論を通して、教育のUD化を推進していくための鍵となるものを参加者とともに探していきたい。 【話題提供】 話題提供者 1 「子どもの「やってみたい！」を大切にする授業UDの再考」 小田原市立酒匂小学校 片岡寛仁 近年、授業のユニバーサルデザイン (UD) が「方法論の一つ」と誤解される場面が見受けられる。「視覚化」「焦点化」「共有化」といった形式的な工夫だけで授業がUD化されたと捉えられていることが、その背景にあるのかもしれない。しかし、本来の授業UDとは、より多くの子どもが内発的な動機づけにより学びに参加し、自らの力で、仲間と共に学びを深めていくための「環境づくりの哲学」であると考えます。 私たちが大切にすべきことは、子どもたちの「やってみたい！」という声を正面から	

受け止める教育である。たとえば低学年の児童は、日々の学習の中で自由な発想や予想外の言動を見せてくれる。それは、教師の想定を超える学びの広がりを示す貴重なサインなのである。その芽を摘まずに育むには、子どもの反応に柔軟に対応し、学習のゴールを教師が一方的に決めるのではなく、子どもたちと共につくっていく姿勢が重要となるのではない。

より多くの子どもにとって個別最適な支援があり、「自分の力でできた」と実感できる経験を重ねていくこと。それこそが、教育のUD化が目指す“共にある学び”だと考える。今まで出会ってくれた児童との実践をもとに提案させていただき、皆様と共に教育のUD化の重要性について学び合いたい。

話題提供者2 「メソッドではなくマインド」

富山県公立小学校 北森 恵

UDLや授業UDを「やってみただけどうまいかない」という声を聞く。それはきっと、「うまくいくまでやっていない」か「そもそも考え方が間違っている」かのどちらかなのではないだろうか。

UDLを実践していて感じるのは、同じ單元だとしても、相手が違えば全く授業デザインが異なるということだ。だから、「これがUDLです」という紹介はしにくく、するとしたら「今の子供たちの求める形はこれです」となる。好きな場所で学んでいる、オプションを多用している、段ボールに囲まれたスペースがある…一部ではそのようなUDLに関する偏見もありそうだが、決してそうではない。UDLはメソッドではなく、「学習者（子供）が学びを舵取っていくために、授業者の自分は何ができるだろうか」という授業者のマインドのもと、子供たちとの対話で授業をデザインしていくものである。

そして、子供と対話できる関係性を構築していくことも重要であり、授業者と学習者の関係性は、学習者同士の関係性にも波及していく。授業デザインも、関係性の構築も、どちらも正解のないものであり、それがUDLや授業UDの普及を阻む最大の原因であると考ええる。正解のないものを追究するのは、誰にとっても不安であり、手間のかかるもののよう感じられるのではないだろうか。でも、だからこそ、子供たちと「どうしていききたい？」と話し、同僚や仲間たちと「どうしていいかわからない」と議論することが必要だと考える。

話題提供者3 「校内研究の推進と、他校とのコラボ研究」

荒川区立第二日暮里小学校 池田真由美

本校には多様な児童がいる。特別支援教室で指導を受けている児童は約10%、外国籍児童は約12%、要保護児童は約2%、不登校及び不登校傾向の児童は約2%である。学力については、区学力調査から学年が上がるにつれて学力差が広がり二極化する傾向が

見られる。また、児童生徒の自己肯定感や学級適応感などを把握するための質問紙調査「i-check」からは、学習意欲が全国平均よりやや低いことが分かる。

このような実態から、教育のUD化を学校経営方針の主軸とした。昨年度から、校内研究に授業UDを取り入れ、すべての学習者が「わかる・できる・楽しい」授業を目指している。今年度は研究テーマを「個別最適な学びと協働的な学びにつながる授業づくり～授業UDやUDLの視点を取り入れて」とし、令和7・8年度の区研究指定校を希望した。研究指定校になることで教員に授業改善の必要性を感じてもらい、校内研究を推進することで児童の学習意欲を高め学力向上を図る。また、次年度の研究発表会を契機に、教育委員会のバックアップの元で、地域の学校とコラボ研究ができるとよい。

私からは、「校内研究の推進」と「他校とのコラボ研究」の2点を話題提供する。